

これからの幸せ 第1回 in 京都

2022年10月11日(火) 京都劇場 | 主催 浄土宗 後援 京都新聞

第一部 講演

山極 壽一(総合地球環境学研究所所長、人類学者)

第二部 座談

三浦 瑠麗(国際政治学者)

稲田 ズイキ(浄土宗僧侶、執筆家・編集者)

山極 壽一

戸松 義晴(浄土宗総合研究所副所長)※コメンテーター

笑い飯・哲夫(漫才師)※司会進行



人類にとって「幸せ」とは何か(山極さん)

連続フォーラムの初回は京都駅ビル内の京都劇場にて。まずは山極壽一さんの講演です。

人類の祖先が二足歩行を始めた700万年前から説き起こし、脳の容量が現代人と同じになった約40万年前には150人規模の集団で生活するようになったと。ところが人類が言葉を持つのは約7万年前。言葉も使わずに150人の集団がまとまって暮らせた理由は「共食」と「共同保育」にあると指摘します。

食物を集団に持ち帰り、仲間と一緒に分けあって食べる「共食」は、集団のコミュニケーションを一気に促進し、人類の「共感力」を向上させます。また人類の赤ちゃんは自分では何もできないため、集団で見守る「共同保育」が必要でした。泣いたり笑ったり、感情豊かな赤ちゃんの訴えに応えることはまた、人間の「共感力」を高めます。

こうした言語によらない「音楽的コミュニケーション」が人間の脳を発達させました。



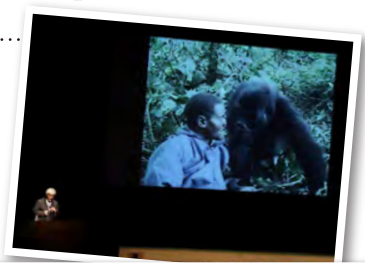
「社交」「共有」「共助」の社会を養う(山極さん)

言葉を獲得すると、人類はアフリカから全世界に広がり、約1万2000年前には農耕牧畜を始め、定住するようになります。このころ世界の人口は500万人でしたが、文字の発明、近代産業革命を経て情報革命に至る現在、約78億人になっています。

殊に近年の急激な情報通信革命は、「知識」と「感情」で物事を判断する人間の脳にとって、「感情」を軽視する社会を進行させました。これに対し山極さんは、「文化は社交であり、社交はリズムである」という劇

作家・山崎正和さんの言葉を借り、これからは「狩猟採集民的」ともいべき「移動する自由」「集まる自由」「対話をする自由」を大切に、定住がもたらす「所有」よりも「行為」に価値を見出すこと。シェアリングと共有財を拡大し公助の社会を養うことではないかと言います。

「このような社会の醸成を、人類の幸福に結びつけて考えてみたいと思います」と締めくくりました。



足元の小さな幸せと向き合ってゆく(三浦さん)

休憩のあとは、笑い飯・哲夫さんの軽妙な小噺「幸せ語り」をはさんで、講師全員による座談会です。

三浦瑠麗さんから、「私が一番幸せだったのは、3歳のころかも」「幸せについて考えるようになったのは、大人になって、不幸を知ったからでは?」という指摘が始まります。不幸は人と比較するから起こり、足りない、ずるい、報われないなどの感情を、社会とつながると知ってしまうというのです。

では、ふれあう集団の規模を小さくし、ベランダでお花でも育てながら生きるのが幸せかといえば、それも違う。理想を求めて現実との乖離に苦しむのが人生ですが、それを人々がやめたら社会は進展しません。

人間が悲しみや不幸から逃れることができないならば、「美味しいご飯が炊けた」とか「私の文章を読んでもらえた」とか、足元の小さな幸せと向き合っていくことのかな、と述べて、話を終えました。



石、犬、花…全ての者と共にある実感(稲田さん)

最年少の稲田ズイキさんは、自らのエピソードを披露します。山登りの最中に拾った石を持ち帰り、「ジョイ」と名付けて暮らしているそうです。

稲田さんにとっての幸せは、幅広い意味での他者とのつながりを感じられたとき。その根底にあるのは、「寂しさ」と分析します。

幼いころから飼っていた愛犬アンディが、学生時代に他界したことが、一番の喪失体験。立ち直れないほどショックを受け、

鬱々とした日々を過ごしましたが、あるときコインランドリーに置かれた花が、「頑張って」と励ましてくれるのを感じました。アンディを通して見ていた世界が変わった瞬間です。

石も、花も、アンディも、亡くなった多くの人もみな一緒にいる。念仏を唱えることで、そういうすべての者たちともあることを実感するときに、稲田さんにとっての幸せな瞬間だと述べました。



ありのままの自分に微笑もう(戸松さん)

戸松義晴さんがコメントします。山極さんが大切なものとして挙げた「共感」「共食」「共同保育」「社交」「共有」「公助」という言葉が印象的でしたが、浄土宗にも「ともいき(共生)」という考えがあると言います。

三浦さんの言う「不幸を知って幸せを考える」を受けて、仏教では幸せか不幸かより、「今心地よい」ことを大切にすると。念仏の「念」は「今、心」と書きます。今日ご来場のみなさんが、今このときを心地よく過ごされたら、それが幸せということなのです。

稲田さんの話は、目の前にいない人やモノにも心を寄せる姿が印象的。悲しむ力、

寂しく思う力は、稲田さんが紹介した「一切の生きとし生けるものは幸せであれ」というお釈迦様の教えに通じている、と戸松さん。

そして締めの一言です。山極さん「今日の皆さんの話をネタに、皆さんたくさん会話して気づきを得てください」

戸松さん「幸せに答えはないけれど、ありのままの自分自身を認めて、自分自身に微笑みましょう」。

哲夫さん「幸せだから笑うんじゃない。笑うから幸せなんだ、ともいいますしね」。

